
零崎一織の零崎一賊（ゼロサキ ファミリー）

世迷い言

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

零崎一織ゼロサキ ファミリーの零崎一賊

【Nコード】

N67740

【作者名】

世迷い言

【あらすじ】

零崎シリーズのギャグに果てしなく近い妄想二次小説です。

なんでこんなの思いついたんだろ……

プロローグ

これは主人公
零崎人識
が20才の頃。
一度は離れた
零崎舞識
に再び捕まり、

【もし】

零崎双識
零崎軋識
零崎曲識

が生きていてなおかつ

新しい“零崎（妹）”が覚醒した
流血で繋がる零崎の生活を描いたモノ。

また零崎に喧嘩を売ったバカがいたらの話し

季節は夏、時間は夜、とある廃墟の真っ只中。
人間が住み着く事もないこの地。人間が近づく事のない俗世とは離
れたこの地。

しかしそこには幾多の影があった。

それは人間の形をしているが人間ではない。
それは鬼

人殺の鬼

殺人鬼の影だ。

ある影は崩れた壁に釘バットをたてかけ、胡座をかき

ある影は折れた柱に背を預け片手にマラカスを携え

ある影はその足元でアップルを弄び

ある影達はボ口屋の上で傍らに大鋏を突き刺し互いに背を預け合う

それらが見据えるのは丁度開けた空間。

そこは真っ赤に染まっており生臭い臭いが漂っている。

そしてその中に立つ二つの影。

互いに血に濡れているがそれはそれらのものではない。

よく見れば至る所に人間の四肢、胴、首が転がっている。

正直言つて吐きたい。

けどこの場にはそんな醜態をさらす存在はいない。

現に血だまりの中の二人はこの現状が当たり前のように平然として
いる。

片やもの凄く嫌そうに

片やもの凄く恍惚な笑みを浮かべている。

「約束ですよ」

片方や恍惚の笑みを浮かべているのは女。

「なあ、マジ止めねー？」

片や嫌そうな笑みを浮かべているのは男。

「約束です」

「……しゃあねえ」

ガツクリと頭を垂らした男は諦めたように懷から鋭利に尖ったナイフを取り出す。

それに合わせ女は自分の谷間から鋭利に尖ったナイフをとりだす。

「それじゃ精々——殺されて解されて並べて揃えて晒されねえようにしてくれや」

「はい。誠心誠意——殺し解し並べ揃え晒す前に——」

犯させていただきます。

兄様

〈巻〉（前書き）

これより

私、^{わたくし}零崎——織の

零崎——始めさせていただく事をお伝え申し上げます。

作者が誤字を修正いたしました。

〈巻〉

少女はとても貴重な体験をしていた。

身体を縄でしばられ、手足を動けないように拘束されている。
そんな彼女を見つめるのはいくつもの目、目、目、目――。

どこかの廃墟の中にこの少女は存在している。

周りには様々な格好をした日本人達。

視線は少女の若々しい肌、足、豊満な胸に釘付けだ。

木箱の“ステージ”“壇上”で舐めまわすような視漢を一身に受けながら少女は

「あらあらあらあらあら、ピンチです。ピンチなのです。ピンチでございます。」

せらせらとまるで他人事のように笑っていた。

《私立高城高校》

東京と神奈川の県境にある有名進学校、兼お金持ち学校。在校生の半分の生徒が資産家や有名所の子息、息女、また半分が天才少年、天才少女というマンモス学校だ。

さて、そんな事はいいとして先程の少女があの状況になるまでを見てみましょう。

「かずっちゃん妙に機嫌がええねえ」

とある教室で妙にニヤニヤしている女の子。
黒板を見てはニヤニヤ、シャープペンを見てはニヤニヤ、窓の外を見てはニヤニヤ。

ハッキリ言って気持ち悪い。現に周りの生徒は気味が悪いらしく、ちよつと冷たい視線を向けていた。

誰も声を掛けないので仕方なしに声を掛けた生徒が一人。

「ハイ。わたくし私は今日とても機嫌が良いのです。今なら、向かうところ敵などありません」

とりあえずの意味不明な返答は置いておこう。

腰まである長い黒髪をユラユラと靡かせ、黒を貴重としたミニス

カートのセーラー服姿の彼女は立ち上がると両の手を後ろで組むとやはりニヤニヤしだした。ついでにクネクネとした動き付きだ。

「いや、意味不明やよ？ そんな事より何かあるん？」

「ハイ。今日は一年半ぶりに姉様と兄様方がお帰りになるのです。末の妹としてこれほど嬉しい事があるでしょうか」

どうやら今日は遠出していた兄、姉が帰ってくるらしい。

「アンタ兄姉いたんね。というかその動き止めへん？ 少しばかり気持ち悪いんよ」

京風の言葉での会話。

周囲の意志を代弁した彼女。こんなニヤニヤして、クネクネした女が同じ空間にいたら誰だって嫌だろう。

「それはそれは失礼いたしました。皆様も失礼いたしました。」

周囲に頭を下げる。周りは苦笑しながらも片手を上げて返事。もう慣れているのだろう本人が謝れば周りも気軽に許すのだ。

「かずっちゃん今日は課外授業もなんもないんよね？」

「ハイ。今日は課外授業も補習もございません。あっても知らぬ、存ぜぬ、行きませぬ」

「だからクネクネ止め。せやったら一緒に帰らん？ ウチ日誌を職員室にだしてくるだけなんよ。ゆっくり歩いてくれたら直ぐに追いつくよ」

「承りました。先に校門に向かってますね」

そして二人は別れる。

ニヤニヤ、クネクネ少女はスキップしながら校門へと向かう。途中それをみた先生が苦笑し、彼女に挨拶をし、また彼女はそれを返す。

先程の京風語りの子ゆつくり歩けと言っていたがそんな事は当の昔に頭から抜け落ちている。

「にーさま、ねーさま、ごーきーたくー。おりょうりなんになさい
ましよう？ おはなしたくさんおねがいしますっ」

下手な歌を歌ってたどり着いた校門前。敷地の外で壁にもたれながら京風語りの子をこれまた変な歌を歌いながら待つ。

そんな時、

「あれ？」

いきなり目の前に滑り込んで来た黒い車。乱暴にドアが開け放たれ

「アレレレレレレ〜」

強引に車内に引き込まれた後、そのまま連れ去られてしまった。

そして現在に至る。

連れてこられた場所はどこかの潰れた工場。もう既に日は沈み、所々に穴の空いた天井からは星が覗き、一つの穴からは真っ赤な三日月が覗いている。

工場の中は真っ暗ではなく電気が引かれているらしく少ないながらも照明はついていた。故に人の目が怪しく光っていて気味の悪さを底上げしていた。

そんな中

「あらあらあらあらあら、ピンチです。ピンチなのです。ピンチでございます。」

一人だけ明るいニヤニヤクネクネ少女。首だけを右へ左へと動かして笑っている彼女はそこだけ昼間みたいに明るかった。

リーダー格の男は引きつった顔で少女を見据える。多分後でなんでこんなバカ娘を連れて来たと部下に怒鳴る事だろう。

「あー、嬢ちゃん。あんた今、どんな状況分かってんのか？」

「ハイ。とても貴重な体験をさせていただいてます。そしてピンチなのです。」

「どうやら一応の状況はわかってるらしい。けどこの明るさはとても不気味だ。」

「これからどうなるのでしょうか？ いまからどうなるのでしょうか？ さてはてどうなるのでしょうか？ そしてどうでしょう？」

リーダー格は眉間を押さえつつニヤニヤクネクネ少女の前に座り込む。

「嬢ちゃんは俺らグレムリンの資金調達、そして殺し名に食い込む為の足がかりとなってもらう。嬢ちゃんの親御さんに金を出させてそれを資金源に組織の拡大。そのままグレムリンを殺し名序列に参入するために動く。嬢ちゃんには悪いがアイツ等の餌になってもらうぜ」

そういつてリーダー格は自分の部下達に目をやる。奴らは待ってます！ とばかりに声を張り上げ、地を鳴らす。目が充血していて今にも暴動が起きそうだ。

「ま、嬢ちゃんが生きて俺たちグレムリンが無事殺し名の序列に加われたらそんな時は俺の女にしてやるぜ。あ、殺し名って知らねえか。殺し名ってのは――」

リーダー格が少女に再び振り向いた時、彼は言葉を止めた。少女がなにやらポカンとした表情で見ているからだ。いったいどうしたのかかと思っていると

[illegible]

突如大きな声を上げて笑い出した。

潰れ廃れた工場の中がシン……と静まり返った。響いているのは少女の狂ったような笑い声。誰もがその奇怪さに後ずさる。

「は は は は は は は は は は は ———— は …… ハア ……」

乱れた髪が髪を隠す。そして髪の間から彼女の目が覗く。

「——っ!？」

リーダー格は息を呑んだ。その目はとてもじゃないが表の人間ができるようなものではない。思わず殺されたかのように錯覚してしまった。その目で見られただけなのにだ。

「——」

少女の口がぱっくりと裂けていく。さながら天井の穴から覗く血色の三日月のように。

「——」

少女は呟く。上手く聞き取れない。リーダー格はよく耳をすましてみた。

「さようでしたか。殺し名でも呪い名でもございませんでしたか。てっきりどこかと繋がっているモノかと。フッフ……」

少女は立ち上がった。縄で拘束されている筈なのにひとりで縄が切れて拘束を解いていた。

「私の勘違いでございましたか……わたくし。兄様のお言葉をお借りするなら“傑作”ですね。そしてこの状況は曲兄様シチュエーションのお言葉で言うなれば“悪くない”」

ミニスカートの裾をパタパタと叩く。

次いでリーダー格を見ると同時に三日月の口が動く。

「グレムリン様。この度は私の勘違わたくしいを正していただきありがとうございます。危うく、“かぞく”を危険に晒してしまふ所でございました。グレムリン様がつきり殺し名か呪い名に繋がっているものとばかり。あ、グレムリンとは“グループ”、“組織”の名称でございますよね？ ハイカラで格好がよろしいですよ。“グレムリン”日本語で“餓鬼”。餓えた鬼。欲望を表す名称。鎖で縛られたこの日本でこの名前を掲げる。皆様の決意が汲んで取れるものです」

「てめえ、何をした！ どうやって縄切った！？」

リーダー格がコンバットナイフを取り出し叫ぶ。しかし、少女はそれを他人事のように無視し、饒舌に言葉を吐き続ける。

「ちなみに先程の“ピンチ”日本語で“危機”という意の言葉ですけども使いどころは間違っておりませんよね？」

—— だって…… ——

突如二人から離れた位置の天井が爆発した。爆炎の中から人影が二人飛び降り、餓鬼の群れの中に着地する。

一人は両の手に手榴弾を持ち、一人は麦藁帽子を被り、右手に釘の打たれたバットを持つ。

群れは突然の事に慌てだす。そこに響いた口笛の音。

何かと思えば今度は身体が動かない。合わせて工場の入り口からまるでオーケストラの如く、気品を持ちながら入場してきた人影がまた一つ。手にはマラカスを持つ。

その両の脇から続いて入ってきた再び二つの人影。

一人は右手に、一人は口に加え、鋏を持っている。

そして

「よう。一年半ぶりだな。ちゃんと学校いつてつか？」

「お久しぶりでございます。あと、申し訳ありません。今回の件で中退をせざるをえないかと……」

入り口の真反対、壇上の裏から20ぐらいの青年がゆっくりと上がってくる。

「かはは。ま、なんとかなんだろ。それよりこのオッサン等は？」

リーダー格は動かない。いや、動けないのだ。体中が見えない何か

に縛られたようで全く動けない。

「“グレムリン”様でございます。日本語で“餓鬼”コレって“傑作”だと思われませんか？」

「確かに“傑作”だな。“餓鬼”が“殺人鬼”をさらっちまうなんてよお」

殺人鬼？

その言葉を聞いたリーダー格は少女を視線だけ動かして見る。

「さようでございますねえ。そして私をさら^{わたくし}ってしまってピンチに陥ってしまうのですよ。」

“ピンチ”って自分の事じゃなくて俺達の事かよ！？

「て、てめえら何モンだ……」

やつとの事で声を絞り出したリーダー格。それを聞いた鍔を持つ二人の一人。針金細工のように手足の異様に長い銀縁メガネの男が口を開いた。

「おやおや、まだ自己紹介してなかったのかい？ 初対面の人にはちゃんと自己紹介しないとダメじゃないか」

「あ、申し訳ありません双兄様」

シュンとしょぼくれた少女。

三日月の口もすっかり縮こまってしまったが直ぐにまたぱっくりと裂けた。

そして、リーダー格、ひいては餓鬼の群れに向き直るとミニスカ
ートの裾を両手で持ち、お嬢様風の礼を取る。

「ご紹介が遅れました。私――

自殺志願――マインドレンデル――

愚神礼賛――シームレスバイアス――

少女趣味――ボルトキープ――

寸鉄殺人――ペリルポイント――

鬼子《人間失格》

自殺志願の後継者

を兄、姉に持たせていただいております。殺し名序列三位“零
崎”

末の《妹失格》

零崎――織せうしき――かすおり

と申します」

末、短いですが。今後ともよしなに

さっそくではございますが

零崎——始めさせていただきます事をお伝え申し上げます

《壱》（後書き）

まだまだまだまだまだまだまだまだまだまだまだまだまだ書き始めたばかりではございますが

今後ともよしなに。

また感想もお待ちしておりますので書いていただけると嬉しくおもいます

。

あ、軋兄様！常兄様も私の分を殺らないで（盗らないで）くださいまし！！

それでは失礼いたしますね♪

兄様~~~~！！

〈貳〉（前書き）

私^{わたくし}零崎一織の兄様達と姉様でございます。

《貳》

殺人鬼、零崎一織の朝は早い。毎朝5時に起床する。

朝シャン、朝食、身嗜み整理、そして登校——なのだが今日は日曜日。

いつも通りに起きなくともよいのだ。

しかし、今日は家賊が帰ってきている。望まなくてもいつも通りになる訳がなかった。

——A M 6 : 0 0——

ここは一織の部屋。

伽藍とし、質素な造りのこの部屋にあるのは勉強机とその上に置かれている写真縦、あとベッドのみ。

とても寂しく、とても冷たく、とても悲しい。そんな部屋だった。

「——」

そんな空間の入り口が音を立てずにゆっくりと開く。スツと入り込んできたのは針金細工のような長い足。針金細工のような長い腕。

針金細工の人影は部屋に侵入した後、テーブルに置かれた写真縦を見て『うふふ……』と気持ちの悪い笑い声を小さく漏らす。そして視線をベッドへと移した。

「人識と違って、私は半年ぶりだけど相変わらず変な寝相だね」

この部屋の主は零崎一織必然的にベッドで寝ているのは一織本人なのだが彼女の寝相はともおかしかった。

まず、枕の位置と頭の位置が天地逆なのである。太ももが枕の位置にあつて足は外に投げ出されている。代わりに頭がスッポリと布団の中にいるのだ。とてもじゃないが女の子の寝相とは思えない。しかし、針金細工の人影は小さく苦笑するのみで少女を起こそうとはしない。

むしろ見ていて気味の悪いにやけ顔でベッドの掛布をめくると自分もそこへ潜り込んでいったのだ——ちゃんと自分の頭が枕位置に来るように……。

「……………キャアアアアアアアアアアア！！！！！」

まあ、かれこれ5分たった後、一織は黒の長袖、黒のミニスカートである学校の制服に着替えて台所に立っていた。やっている事はもちろん朝食の準備。食材は兄――ではなく卵、ベーコン、生野菜、果物とても健康的である。

「もう、双兄様も立派な大人なのですから節度ある行動をお願いいたします。お帰りになられる度にコレではどうかと…」

「兄妹のスキンシップじゃないか。可愛い妹を兄が起こす。日曜日だからって寝ばなっしじゃよくないよ？」

「双兄様わたくし、私最近お造りに凝っておりますして刺身包丁、河豚フグ刺し包丁、どちらがよろしいですか？」

「ハハハッ、刺身はまた後日にしよう。今度生きのいい鯛でも仕入れてくるよ」

「さようでございますか！ 私わたくし嬉しゅうございます、約束でございますよ双兄様う、お刺身うお刺身う」

後日、零崎の食卓に鯛の造りが出る事が決定となった。

そろそろ7時となる頃。テーブルには朝食が並べられる。そして後から来る兄達と姉の為にコーヒードリップ、紅茶を入れる準備を始めた。コーヒード豆をメーカーにセットすると同時にテーブルで新聞を読んでいる兄に声を掛ける。

「双兄様、お読み物の所申し訳ありません。舞姉様を起こしてきていただいてもよろしいでしょうか？」

「ん？ 私は全然構わないよ。直ぐに起こしてこよう」

可愛い妹の頼みなのか兄はルンルンスキップで玄関とは別の方
向にある扉をくぐり姿を消した。

扉が完全に閉じて30秒後。

「キヤアアアアアアアアア！！？！？」

「フツ——姉妹は運命共同体なのでございますよ」

その扉の先から大きな悲鳴が響いた。直後、ドドドドツと凄まじ
い足音が聞こえてきて兄が消えた扉がバンツと開け放たれる。現れ
たのはニット帽を被ったピンクのパジャマ姿をした女性。年齢的に
は一織の一つか二つ上ぐらいだろう。

彼女は目の端に涙を浮かべながら迫ってきた。

「一織ちゃん！ なんで一織ちゃんじゃなくてお兄ちゃんがお越
しにくるのですか！？ 危うくお姉さんの貞操が黒ヒゲ危機一髪
でしたよ！？」

「申し訳ありません舞姉様。 わたくし 私などのような妹に起こされると
気分が害されるかと思ひまして……」

「アレの方が害だっつーの！！」

ここでご紹介。ニット帽のこの女性。殺し名序列3位《零崎一賊
》の末から二番目にして長女『自殺志願の後継者』無桐伊織こと零

崎舞織である。

「ヒドいなあ伊織ちゃん。コレは兄妹のスキンシップだと」「それでは、零崎を開始します」 うん。やっぱり姉妹だね。こうもツンデ「零崎——再び始めさせていたたく事をお伝え申し上げます」 まった！流石に2対1はキツイ！！」

零崎双識。《零崎一賊》の特攻隊長にして長兄。一賊のリーダー的存在。《マインドレンデル自殺志願》、《二十人目の地獄》の二つ名を持つ。両刃の大鋏《自殺志願》を愛用する。そして妹マニアで変態。

「もう！あ、兄様達を起こさないと……」

「リルはもう出てったよ」

「えー！ 常兄様もうお出になられたのですかー！？」

零崎常識——

零崎一賊の一人で高笑いしながら人を殺す爆熱の殺人鬼。二つ名は《寸鉄殺人》（ペリルポイント）。

「そう言っちゃダメですよー一織ちゃん。常識さんは忙しい中ちゃんと顔出しに来てくれてたんですから」

「ハイ……」

まことに残念だが零崎常識は今朝はいないようだ。
家賊みんなで食事ができない事に寂しそうな表情をする一織。けど直ぐに気を取り直したらしく笑顔を見せる。

「それでは私は他の兄様を起こしてまいりますのでしばしお待ちください」

二人に頭を下げ自分の部屋から出る。

そしてエレベーターを使い上の階へと登るとある一室の前に立ち鍵を取り出してロックを外した。

玄関には乱暴に脱ぎ捨てられたサンダルと丁寧に揃えられた革靴が一組みずつ。

自分の靴もそこに並べ、奥へと進む。使われてないリビングを通り抜けてたどり着いた先は二つのドアの前。まず一つ目を静かに開けて中を覗き込む。

「――」

部屋の主はまだ寝ていた。小さく、規則正しい寝息をたてている人物を確認した後、ゆつくりと歩み寄る。

「兄様、軋兄様、朝でございます。起きてくださいまし」

ゆつくりと肩を揺する。が彼は起きない。むしろ鬱陶しそうに掛け布団を頭まで引き上げて再び寝入ってしまった。

「はぁ……………」

そんな彼に一織りは小さく溜め息をつくと壁に立てかけてある長い細い鞆に目をやった。

——ニヤリ——

口がぱっくりと裂けた。

彼女はニヤニヤしつつも静かな動作で鞆から一本のバットを取り出す。しかし、それはただのバットではなく釘バットだ。また、通常その製作には木製バットを用いるべきなのだが、コレは中身まで全てが鉛でできている。釘も打ち込まれたものではなく、そもそものようにデザインされた完全一体型だ。当然、コレは半端ではない、洒落にならない程の重量になる訳だ。もちろん女の子であり、ゴリラではない一織に持ち上げる事などできる筈もなく、彼女は引きずるようにして釘バットを移動させる。二歩程の距離を残しベッドに背を向け目の前に両手で杖をつくようにして釘バットを立てた。

「軋兄様。コレから無礼を働くこの愚かな妹をお許してください。」

天場をぱっくりと口元が裂けた笑顔で見た後、釘バットに背負い投げをかけた。落下地点はベッドである——ゴシヤ……。

「あゝあああゝ ああああああゝ あああ！！？」

ベッドから耳を塞ぎなくなるような悲鳴が上がったがそれよりも早く彼女は退室した。

背にした扉からは未だに悲鳴が聞こえるが一織は十字を切った後、黙祷を捧げるだけで済ませ隣の部屋のドアに手をかけた。今度は先程のように静かに開くのではなく。恐る恐る、何かに怯えたようにゆっくりとドアを開いていったほんの少しだけ開かれたドアの隙間から中の様子を窺う。

「おはようございます。一織でございます。起きてらっしゃいますでしょうか？」

「ああ、起きている」

中からの返事を聞いた一織は再び恐る恐る扉を開いて中に入った。部屋の中は日の明かりで明るかった。そんな空間でこの主は椅子に腰掛けて書き物をしていた。

「悪くない。最後の一節をどうしようか悩んでいたが今のアスの悲鳴で纏まった。」

「それはようございました。」

「だが……。」

書き物をしている人物がテーブルに置いてある黒いマラカスを一振り。同時に一織の身体が動かなくなった。

「兄に対する礼儀がなってない。じゃれるのも悪くない。が、目上は敬うべきだ」

「も、申し訳ありません。曲識兄様」

「全く……。ギリギリ少女から脱して、なおかつ妹でなかったら今頃殺していたな。まあいい、おはようと言わせてもらおう」

零崎曲識

《零崎一賊》唯一の禁欲者にして、究極の菜食主義者。二つ名は《少女趣味》（ボルトキープ）。《逃げの曲識》とも呼ばれる。天然で、しかも思い込みが激しい、そして何より音楽家極まりない殺

人鬼。

彼は挨拶をした後、再びマラカスを振る。同時に一織の身体の拘束は解れた。

「おはようございます曲兄様」

「一織……。お前はもう少し優しく起こす事はできんのちゃ？」

一織りの後ろから腹をさすりながら部屋に入ってきた男性。彼は軽く彼女の頭に拳を落とした。

「おはようございます軋識兄様。お言葉ですが私は一度優しく起こそうと試みました。愚神礼賛も私のお兄様を思っ心わたくしと思ってくださいまし」

「ちゃんと“無礼”がどうたら聞こえとったちゃ。あとこんな重い心はいらん」

「曲兄様！ 軋兄様わたくしが私はいらないとおっしゃいます！！」

「アス。僕が言えた義理ではないがそれはヒドいと思う」

「トキも喰らって見たらわかるっちゃか？」

零崎軋識

《愚神礼賛》（シームレスバイアス）の二つ名を持つ。二つ名と同名の全鉛製“釘バット”《愚神礼賛》を愛用する、一賊史上最も荒々しく、最も容赦のない手口で、最も多くの人間を殺した殺人鬼。ネットで遊ぶのが趣味。

曲識と軋識を起こしてきた彼女は二人を連れて一度自分が住まう。部屋に戻ってきた。二人が席に座るのを確認した後、3人の兄と一人の姉にコーヒーを入れて差し出す。

「それでは最後に兄様を起こしてまいりますね。」

再び断りを入れて部屋を出る。今度は下ではなく上の階へと上がり、下の階と同じくして取り出した鍵を使い部屋を開ける。ここは双識ともう一人の兄が泊まっている部屋。玄関には靴が一組み、自分の靴もそこに丁寧に並べ3メートル程の廊下を歩く。

——1メートル——ゴトッ……

——2メートル——ドスッ……

——3メートル——ゴトゴトゴトゴトゴト……

——部屋の前——コト、コト……ガシャ……

「アハハ♪」

ゆつくりと部屋の扉を小さいけれども不気味な笑い声を漏らしながら開け放つ。あわせて目に入ったベッド。そこで寝息を立てているのは20程の青年。顔に刺青を施した童顔な彼を一織は恍惚の表情で見つめる。

一歩、また一歩と静かに歩みよる。

「兄様……。私の兄様……お慕いしておりますわたくし。このような淫らなら妹はお嫌いでございましょう。しかし、私はそれでもかまいませんぬ。」

彼女今の服装は下着のみ、頬を上気させ、荒い吐息のままベッドへと潜り込んでいった。

「うわあああああああ!!??」

――

「そういえば一織ちゃんはスパッツ派かい？ 私としてはアレは邪道だと思っただが」

「朝っぱらからなに言ってるんちゃ、この変態」

「いやいや、コレは大事な事だよ。それが可愛い妹となればね」

「一織ちゃん。このどうしようもない変態は無視してもいいですよ」

「ん、私はスパツツよりもむしろノーぱ」「一織ちゃんちよつと来い!!」「アレレレレ」

「悪くない。姉妹の仲がいいのは良いことだ」

舞織が一織を連れて部屋に消える。1分後、ガツクリと肩を落とした。舞織が妹を連れて出てきた。

「マジで履いてなかったです。一織ちゃん、今回もお姉さんとして言わせてもらいますけど本当にお願いですから変態にはならないでください」

「むう、私としてはいつでも兄様に操をいただいてもらうためにこのような布切れは邪魔な存在なのですが……」

場所は再び一織の住まう部屋。家賊が皆席に着いている。内一人はぐったりとしているが……

「死ね……死ね……死ね……」

死ねをつぶやき続けてる人物。先程一織と激戦を繰り広げた彼

零崎人識

《零崎一賊》の鬼子。一賊同士の間で生まれた血統書付きの《零崎一賊》。

「人識……大丈夫だっちゃか？」

「私の愛を一身に受けられたので大丈夫です」
わたくし

「悪くない」

零崎一織

《零崎一賊》の末っ子。ある戯れ言に《妹失格》と言われそれが二つ名となった。まだ本格的にデビューをしてないが予定としては高校を出てからの予定。

ちなみにアホではないがバカであり、変態チックな所がある。

《貳》（後書き）

つたない文章で申し訳ございません。世迷い言にもう少し文章表現力がございましたらよかったです。

こんな作品でよろしかったら感想をよろしくお願い致します。

私^{わたくし}一織が誠心誠意心を込めてお返事を書かせていただきます。

あ、兄様姉様。双兄様が今晚鯛を食べさせてくださるそうでございます。

それでは次の更新でまたお会いしましょう。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6774o/>

零崎一織の零崎一賊（ゼロサキ ファミリー）

2010年11月17日16時51分発行